李退溪の養眞菴・寒栖菴・陶山書堂に於ける
「すまう」ことの意味

——「すまう」ことの場所論的研究 1——

A STUDY ON THE PLACE OF T'OE GYE'S SECLUDED LIFE

——Topo-logy as Theory of Place on Dwelling 1——

西垣安比古*

Yasuhiko NISHIGAKI

In this report we discuss about Yi-T'oe gye (李退溪)'s hermitages of '養眞菴', '寒栖菴' and '陶山書堂'. According to '陶山記' the place for '陶山書堂' was decided by geomancy. It was set between mountain and river, and T'oe gye leaded a secluded life at the very place. To dwell between mountain and river was indispensable for T'oe gye to realize himself. T'oe gye built many pavilions as hermitage for Confucian practice between mountain and river. And as above mentioned three names of those hermitages are transmitted, so we attempt to elucidate the meaning of dwelling between mountain and river through chinese poems that was made in these three hermitages. T'oe gye intended to return to authentic existence through a secluded life in '養眞菴'. He wanted to deny the secular world, so '養眞菴' had to be isolated from the secular world. On the other hand, through a secluded life in '寒栖菴', T'oe gye reach the stage of '寒'. This stage of '寒' means the way of being 'ex-sistere', so this stage of '寒' means directly T'oe gye's way of being. And at the same time this stage of '寒' means also the mood of the place around '寒栖菴'. T'oe gye built '陶山書堂' as the last hermitage for his life. In '寒栖菴' there was only one named room (靜習堂), but '陶山書堂' has two named rooms (巖栖軒, 玩樂齋). First of all '巖栖軒' was completed in '陶山書堂', after that '玩樂齋' was built in the same house. '巖栖' and '寒栖' mean to dwell in seclusion by a rock. And T'oe gye hums about secluded life in '巖栖軒' as follows; "樂無窮" (ease without limit), "古往今來時已晚" (as time flies like an arrow, it is too late). According to these passages, we can understand the ambiguous meaning of T'oe gye's secluded life.

Keywords : Yi-T'oe gye, place, dwelling, Confucianism, poem, geomancy

一 序

東方礼儀之國朝鮮に於いては、李朝時代に入り儒教の興隆がめざましく、多くの大儒を輩出したが、しかし一方では、この時代はこれらの儒者達にとって、それほど平坦なものではなかった。李朝時代は時代が降るに従って儒者達の士禍党争の歴史として展開し、ついには壬辰倭乱、丙子胡乱¹⁾の勃発に至る。それ故、多くの儒者達は流配され、あるいは帰郷して、山水の間に隠棲することになる。つまり、この時代の儒者達の多くは故郷から都へ出て官吏としての生活をし、再び帰郷して隠棲するという様に故郷と都とを往還する生をおくったと言える。このような隠棲はしばしば明哲保身や現実逃避という語によって説明され、そして、その様な側面を一概に否定しすることはできないであろうが、一方では、この様

な生を通して、人が人としてこの地上に於いて「すまう」ことそのこと自体の意味が疑問とならざるを得ず、山水の間の隠遁の生は「すまう」ことの自覚へと深まりを示した事も否定できないことであろうと思われる。

これらの儒者は当時はもちろん現代に至るまで厚い尊敬を受けており、彼等の家宅のいくつかは貴重な遺構として保存されている。ここでは特に退溪李滉の陶山書堂を具体例として、山水の間に於いて、背山臨水して「すまう」ことの意味の場所論的究明²⁾を試みたい。

二 李退溪と陶山書堂

李退溪は孝宗弘治十四年(1501年)慶尚北道安東郡禮安縣溫溪里に生まれた。そして晩年六十九才の時には、実際に任につくことはなかったが、議政府右贊成に任じ

* 九州大学 助手・工博

Research Assistant of Kyushu Univ., Dr. Eng.

られるまでになったのであるから、官吏として功を極めたとはいえよう。しかし、退溪の「年譜」³⁾を見れば明宗元年嘉靖二十五年（1546年）には校書官校理、禮賓寺正にチェス（王の直接任命）を受けながら赴任せず、又、その三年後、豊基郡守の任についていた時も、一方的に辞表を出して許可を受けることなく帰郷し、告身二等を減じられるほどであった事など、むしろ故郷に於いて学問に専心する閑暇な生を望んでいた事が窺える。

そして、上にあげた明宗元年には温溪里に流れる兎溪の東の岩上に養眞菴を建てて住み、その時この川の名前を退溪とかえ、自らの号としたのであるが、この養眞や退溪という命名に故郷の山水の間に於ける隠居、隠棲への李退溪の決意を読みとることは容易であろう。退溪の退はその字義からも「退く」ことを意味していることは明らかであり、それを隠棲の場所に流れる川の名とすると同時にみずからの号としている事は隠棲への決意の深さを示していよう。また、そこに建てられた菴の養眞という名は陶淵明の詩「（前略）／投冠旅旧墟／不為好爵榮／養眞衡茅下／（後略）」⁴⁾からとられていると考えられ、これはこの時の退溪の境地をそのままに現わしていたといえよう。

嘉靖二十九年（1550年）に突然と帰郷した時にもその年の二月に、退溪西方に寒栖菴⁵⁾を建てたのであるが、この菴をめぐって「結茅爲林廬／下有寒泉瀉／棲遲足可娛／不恨無知者（寒棲）」⁶⁾と詠じられているように、それは簡素な茅廬に於ける生であった。そして、ここでも「林廬」「棲遲」「不恨無知者」という句などから、それが山水の間に於ける隠棲であったことが窺える。

嘉靖三十六年（1557年）、陶山南方に書堂を建てる敷地を準備し、翌年には滄浪臺（後に天淵臺と改称）を築き、嘉靖三十九年（1560年）李退溪六十才の年、そこに書堂が完成し陶山書堂と名づけられた。又、この時退溪のもとで学ぶソンビ達のために隴雲精舎が建てられ、この精舎の西方には、これらに少し遅れて亦樂と呼ばれる建物も建てられている。翌年（嘉靖四十年）には節友社が築かれ、ここには退溪が愛した松菊竹梅が植えられた。この様に陶山書堂を中心とする退溪の「すまい」は嘉靖三十六年から四十年にかけて徐々に完成し、この陶山こそが退溪の終の住み処となったのである。嘉靖四十年十一月に退溪は有名な「陶山雜詠并記」⁷⁾を記しており、以下この「陶山雜詠并記」に於いて退溪の記すところに従いながら、陶山及び陶山書堂について概観しておこう。

「陶山雜詠并記」は陶山書堂の周辺の景色を詠じた七言絶句十八首からなる「陶山雜詠」と、陶山での隠棲について記した「陶山記」を合わせたものであるが、ここではまず「陶山記」からみていこう。

「靈芝之一枝東出而爲陶山」⁸⁾と書堂の建てられた陶山

が靈芝山から東出する山脈上に在る事が述べられ、この陶山はそれほど高くもなく、山峽が広く、形勢が秀いでいると言う。そして、この陶山とその周辺の形勢を「方位不偏故其旁之峯巒溪壑皆若拱揖環抱於此山然也」⁹⁾とし、又「（陶山の）左にある山は東翠屏と言い、右にある山は西翠屏と言う。東屏は清涼山から出ており、この山の東方に至って広がった懷が臍にぼんやりと開け、西屏は靈芝山から出て、西方に至って峰々がそそり立ち高くそびえている。」¹⁰⁾と述べている。この左右（即ち東西）の屏風の様な山々に囲まれて、前方（即ち南）には広々とした平野がひろがっており、山後には退溪があり、山の南には洛川が流れていると言う。

「陶山記」冒頭部分をみてきたが、ここでの李退溪の記述は風水地理説に即してなされており、陶山が明堂の地である事が記されていると考えられる点に注目しておかねばならない。つまり、「陶山記」に言う靈芝山、清涼山は風水の用語で言えば宗山、祖山にあたり、そこから出て左右（東西）に続く山脈、東翠屏と西翠屏はそれぞれ青龍、白虎に該当するであろう。そして、この東翠屏と西翠屏とに囲まれた平野が明堂にあたることは言うまでもない。そればかりではなく、この平野が広々としている事も、又、そこに洛川が流れている事も、およそ「陶山記」の冒頭に述べられている事は全て風水説に於いて「すまい」を築くべき理想の場所が備えていなければならないとされている条件をそのままに列挙している観さえあると言える。しかし、退溪は単に風水説にのみ依りながら陶山が「すまい」を築くべき理想の場所である事を述べているのではない。上にあげた陶山をめぐっての記述につづけて「ここには小さな谷があるが、前には江（洛川）と野が見おろされ、奥まって静かで居ごち良く、しかもはるかに開かれており、山のふもとや岩々は鮮やかに冴えており、石井の水は甘く、いわゆる肥遯する処として適している。」¹¹⁾と述べている。ここでも前半は既に述べた陶山の形勢についての記述とおおよそ重なるが、ただ、その様な形勢の場所が「肥遯する処として適している。」¹²⁾とされている事が重要な意味をもつであろう。

この「肥遯」の語は隠者の境地を讃えてしばしば用いられたのであるが、それは『易』「遯卦」に「上九。肥遯。无不利。象曰。肥遯无不利。无所疑也。」¹³⁾とあることによる。ここに言う「上九」の位置は「この世間の外」であり「無位の場所」「俗世間を離れること最も遠い場所である。」¹⁴⁾『中庸』「序卦伝」に、者は恒久的にその場所に居ることはできないので恆の卦あとに遯の卦が続く¹⁵⁾と言い、「遯はのがれる。退避の意味。」¹⁶⁾「遁の字と通用する。」¹⁷⁾と言う。「肥はゆったりと余裕のある意味」¹⁸⁾であるから、「肥遯」とは「ゆったりとその隠れ家に自得していられる」¹⁹⁾ことを意味しているのである。

り、また「肥遯は飛遯と同じく超然とすること」²⁰⁾を意味していると言う。

李退溪は「陶山記」に先がけて陶山書堂をめぐってそれぞれの場所ごとに七言絶句を一首ずつ、あわせて十八首からなる「陶山雜詠」を賦し、それらを合わせて「陶山雜詠并記」としたことについては上にも少し触れたが、その「陶山雜詠」第一首を「陶山書堂」²¹⁾と題し

大舜親陶樂且安
淵明躬稼亦歡顏
聖賢心事吾何得
白首歸來試考槃

(大舜陶に親しみて楽しみ且つ安んじ／淵明躬稼をまきて亦た顔を歡ばす／聖賢の心事、吾れ何をか得たる／白首歸り來たてて考槃を試む)²²⁾

と詠じている。この詩の冒頭にみえる「大舜親陶」は虞舜が河濱で素焼の土器を焼いたという故事を謂うのであろうが、ここにみえる陶には陶淵明の陶、陶山書堂の陶がアレゴリカルに重ね合わされていることは明らかであろう。そして、ここでは陶山書堂に於ける生が白首歸來しての考槃の生であったことが詠じられており、李退溪が聖賢の、つまり大舜や淵明の心事を得たとは言えないとしても、陶山書堂に於ける退溪の生は、陶淵明が「歸去來辭」に詠じている様な自ら田畑を耕し、そこに自足する生であり、大舜の陶に親しんでなしたような樂且安の生であったとされている。

又、その様な考槃の生活について「陶山記」の書かれたその同じ年に、退溪は次の詩を詠じている²³⁾。

花發巖崖春寂寂
鳥鳴潤樹水潺潺
偶從山後携童冠
閒到山前看考槃

巖崖の山に寂寂として春が訪れ、又、川の水が潺潺^{センセン}として流れる。ここには花が發し鳥が鳴く山水の春の景色が詠じられている。そして、この詩に付けられた自註に「歩自溪上踰山至書堂、李福弘徳弘琴悌荀輩從之」²⁴⁾とあり、『言行録三』にも「到玩樂齋、時勑立未就、坐節友社梅下、有僧進南冥詩、(中略)困次以贈、又作一絶云」²⁵⁾と記しそれに続けてこの詩があげられていることから、後二句に詠じられている童冠が李福弘・徳弘など退溪の弟子達であり、「山前看考槃」とあるのは陶山を背にして建てられた陶山書堂のことであったことが窺える。ここでも陶山書堂での生を考槃の生としており、この七言絶句が『論語』「卷六先進第十一」の「莫春者春服既成、得冠者五六人童子六七人、浴乎沂 風乎舞雩、詠而歸」²⁶⁾をふまえて詠じられていることは明らかであろう。この詩について李徳弘が退溪に問うて「沂上之樂、樂其日用之常上下同流各得其所妙也」²⁷⁾と言うのに対して、退溪はそれを言いすぎであるとたしなめつつもその様な意味のあることを認めているのである。

以上「陶山記」に従って陶山書堂を概観してきたが、退溪はこの場所を風水説に従って背山臨水する場所としてとらえ、そこでの生を肥遯、考槃という語が表わす隱棲、隱遁の生としていることが読みとられた。ここでは山水の間に於いて背山臨水することが、肥遯・考槃の生にとって不可欠のこととされている。次にこの山水について特に樂山樂水論をめぐって退溪自身の言葉に従って考察しておきたい。

三 樂山水

退溪の『自省録』中に「權生好文の樂山樂水論に答える」²⁸⁾文が掲げられており、『論語』「雍也篇」の「知者樂水、仁者樂山、知者動、仁者靜、知者樂、仁者壽」²⁹⁾の解釈についての退溪の見解が明らかにされている。

ここで退溪は『朱子集註』に依拠しながら權好文が謂う「人與山水之性本一」³⁰⁾、「體山水之動靜而行仁智之道」³¹⁾の二点に対して反論している。退溪は人と山水の性が本来同一であるとする第一の点に対しては、『朱子集註』に「有似於水故樂水(中略)有似於山故樂山」³²⁾とあり、ここにみえる二字の「似」から「但曰仁者類乎山故樂山智者類乎水故樂水」³³⁾と解釈できると言う。仁者は山と似ているために山を好み、智者は水と似ているために水を好むのであり、人と山水の性が本来同一だということではないとしている。「似ている」というのはただ仁者と智者の氣象と意思を指して言っているのであり、山水に仁知の本然を求めたのではないと言う。第二の点に対してもやはり『朱子集註』に「動靜以體言。樂壽以効言也」³⁴⁾と述べられていることから「知者動、仁者靜、知者樂、仁者壽」³⁵⁾の動靜は仁知の體を以て言い、樂壽は仁知の効を以て言っているのであって、仁知本然の理致を言ったのではないとする。つまり、仁知の形体と作用について言っており、それらの原因となるべき理について言ったものではないと言う³⁶⁾。それゆえ『論語』「雍也篇」の「知者樂水、仁者樂山」³⁷⁾について退溪は「之欲人因可象而求其實以爲指準模範之極耳非欲其就山水而求仁智也」³⁸⁾と述べるのである。可象に因って真実を求め、それを指準模範の極とするのであって、山水そのものに仁智を求めるのではないと言う。従って樂山樂水という二樂の意味を知ろうとすれば智者、仁者の氣象と意^{ありさま}思^{こころのおもひ}を知らなければならず、それらは外的な他に求められるものではないとする。そして、「反諸吾心而得其實」³⁹⁾と述べているように吾が心を顧み反省し、真実を得る以外に二樂の意味を知る道はないと言うのである。

この様に二樂の意味を知る為には、外的な他者である山水に求めるのではなく吾が心を顧みなければならないとする退溪は、權好文の「人與山水之性本一」⁴⁰⁾、「體山水之動靜而行仁智之道」⁴¹⁾とする態度に対して「今不知

務此而徒見其巍巍然蒼蒼然者曰吾以是求仁者之樂混混然滔滔然者曰吾以是求智者之樂、吾恐其莽莽蕩蕩愈求而愈不近矣」⁴²⁾と述べ、ただ単に高く蒼い山を見て仁者の樂を求め、限りなく滔滔と流れる水を見て知者の樂を求めると言うのは莽蕩であり求めれば求めるほどに真実から遠ざかると厳しく批判するのである。

しかし、そうであるとするならば、吾が心を顧み、そこに真実を求めるような思索の態度のみが第一義的に意味があり、山水の間に「すまう」ことは二義的な事柄にすぎないのであろうか。ふたたび「陶山記」に立ちもどってそのことについて考察しておきたい。

「陶山記」に於いて退溪は山林を楽しむ人に二者があるとし、一は「玄虚を思慕して高尚に暮らす人」⁴³⁾であり、一は「道義を楽しみ心性を養うことを楽しむ人」⁴⁴⁾であると言う。そして、前者は「身を汚されることを恐れて俗世との因縁を切り、極端な人は鳥や獣のように生きながらそれを誤っていると考えない人」⁴⁵⁾であるとして、このような山水に没入しての生を否定する。しかし、同時に後者についても「楽しむのは糟粕だけであって、伝えることのできない微妙な理致に至っては求めれば求めるほど得ることができず楽しみはどこにあるのであろうか」⁴⁶⁾とやはり批判を加えている。ここに言う糟粕は斎桓公の故事にちなんでいるのであり、大工が車輪を作る技術を息子に伝えようとする時、道具や法度は伝えられるが、それらをあやつる技術そのものは伝えられないということから、それと同様に昔の聖人の文章もただそれだけでは微妙な理致は伝えられず、それは糟粕(かす、くず)にすぎないという事を意味している。つまり山林に居て、ただ聖人の文章のみを学ぼうとする、思索のみを第一義とする様な態度をも退溪は否定しているのである。

又、ある人が「古人之樂、得之心而不假於外物、夫顏淵是陋巷、原憲之甕灶、何有於山水、故凡有特於外物有、皆非眞樂也」⁴⁷⁾と、顏淵や原憲の處身を見れば古人は山や水といった外の事物に期待しておらず、それは外的な山水の間には眞の樂がないからであると謂うのに対し、ここでも退溪は、「不然」とはっきりそれを否定している。顏淵や原憲の山にも水にも親しまない生活は意図してそうしたのではなく、それにもかかわらずその様な所に平安にしていたのを貴く思うのであって、「使斯人而遇斯境、則其爲樂、豈不有深於吾徒者乎」⁴⁸⁾と述べ、もし顏淵や原憲がこの様な景色に出会っていたら、その樂は我々にまして深いであろうと言う。そして退溪は「陶山記」の結びの部分に「則與點之歎、何以特發於沂水之上、卒歲之願、何以獨詠於蘆峯之巔乎」⁴⁹⁾と『論語』「先進第十一」の「浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸」⁵⁰⁾や朱子「雲谷十二詠」⁵¹⁾中の一句をあげて樂山樂水の生を肯定している。退溪にとって、山水の間に「すまう」ことが、彼

の生の深い次元に於ける実現に不可欠の事柄であったと考えてよい。以下に於いては退溪の「陶山雜詠」、「記夢詩」等「すまい」を詠じた多くの漢詩等を参照しつつ山水の間に「すまう」ことの意味の解明を試みたい。

ここに取り上げられる時調や漢詩は李退溪自身が「儒家意味自別、工文藝非儒也」⁵²⁾と言うごとく、あるいは儒者の眞摯な学問の余技として作られたものに過ぎず、ここでの「すまう」ことの意味の考察にとっても余分の外的な事柄にすぎないとも考えられよう。しかし一方では「閑居二十詠 吟詩」に「(前略)／與來情適已難禁／風雲動處有神助／葷血清時絶俗音／(後略)」⁵³⁾とあるごとく、詩は詩作する主体やそのおかれた場所と内的に深く連動しながら自から作り出されると言う。この様な詩作行為の逆説的な在り方にこそ、「すまう」ことの意味解明の緒が見いだされるのではなかろうか。本論に於いてやがて明らかにされることではあるが先取りして言えば、「すまう」ことそのことが詩作の場を拓くのであり、ここでの「すまう」ことの意味解明が詩作品の解釈を通してなされることもその様な詩作と「すまう」ことの内的連関にその根底的な基盤を見だし得ることに依拠しているのである。

四 養眞菴・寒栖菴・陶山書堂

既にその一端にふれたが、ここで退溪の書堂建設についていまだ少し詳細にみておきたい。嘉靖二十五年(1546年)に養眞菴を建てたことは上述した通りであるが、その養眞菴を建てる前に退溪は溫溪里南方芝山北方に小さな菴を建てている。しかし、そこは人家が多く幽寂でないので、退溪下流数里の東巖の旁に仮寓し養眞菴を建ててそこに移ったと言う。⁵⁴⁾

そして、その四年の後嘉靖二十九年二月始めには、退溪之西に卜居して寒栖菴を構えたが、この時もその前に霞明洞紫霞峯のふもとに土地を得て室を営むが竣工できず、竹洞に移った。そして、この竹洞も谷がせまく溪の流がないので三遷の後ついに溪上に卜居して寒栖菴を建てることになった⁵⁵⁾と言う。

最後に退溪は嘉靖三十六年三月陶山南方に書堂を建てる敷地を準備し陶山書堂を営むことになるが、この陶山書堂の建築に際しても「陶山記」に「始余卜居溪上臨溪縛屋數間以爲藏書養拙之所蓋三遷其地而輒爲風雨所壞且以溪上偏於舛寂而不稱於曠懷己乃謁謀遷而得地於山之南也。」⁵⁶⁾とある様に、何度も居を移したことが知られる。卜居して溪に臨んで二三間の小さな書堂を建て「藏書養拙之所」としたが、それらの書堂は雨風で壊れてしまったと言う。退溪はこの為に三度も居を移したが、その度に雨風で壊れてしまったと言うのであるから、それらの書堂はごく簡素なものであったと思われる。この様に雨風にさらされ簡素な建物では維持することもできない場

所はともかく、次に「溪上偏於埽寂而不稱於曠懷己」とされていることが注目される。溪上があまりにも閑寂すぎて心を広くするのに適さないために居を移したと言うのである。溫溪里南方に建てたときのことを合わせて考えれば人家が多く幽寂でない処はもちろん、人里離れて閑寂すぎても書堂を建てるにふさわしい場所ではないとされているのである。

この様に退溪は書堂を建てて「すまう」場所を注意深く選んでいたことが窺えるが、特に嘉靖二十五年養眞菴に先だって建てられた菴から嘉靖三十九年に完成する陶山書堂まで約十五年の間に着目すれば、この間に退溪は十度に近い書堂建設を行なったことになるのであり、このことから退溪にとって「藏書養拙」の「すまい」の場所がいかに重要な意味をもっていたかが推察されよう。

退溪が陶山南方に場所を得てから陶山書堂が完成するに到るまで約四年の歳月を要しているが、退溪はこの間に何度もこの地を訪ずれたらしく、また『言行録』『樂山水』にも「先生得陶山、未成精舍時、常言山水清奇、甚合所求、夢寐間、常在此中」⁵⁷⁾とあり、陶山の地がいかに退溪の心になう処であったかを物語っている。同時にこのことは書堂建設にとってその建てられる場所がいかに重要であったかと言うことをも同時に示している。そしてなによりも「陶山雜詠并記」、『言行録』『樂山水』等に於いて書堂建設の場所の重要性が述べられていることは既に縷説した通りである。

この様にして卜居し、慎重に選地して建てられた書堂のうち退溪「年譜」を引いて上述したところにもみられるように養眞庵、寒栖庵、陶山書堂の三者の名が知られており、ここでもこれら三者についてみておきたい。

養眞菴は嘉靖二十五年（1546年）に建てられたのであるが、この年五月退溪は病気を理由に官職を解かれており、七月には夫人権氏を亡くしている。そして八月には校書官校理・承文院校理に、十一月には禮賓使正にチェス（王の直接任命）を受けるが赴任せず退溪東の岩上に養眞菴を建て本格的に山水の間に於ける隠棲をはじめたと推測される⁵⁸⁾。

退溪はこの菴をめぐる「東巖言志」一首⁵⁹⁾を遺している。

新ト東偏巨麓頭
縦横巖石總成幽
烟雲杳靄山間老
溪澗彎環野際流
萬卷生涯欣有托
一犁心事數猶求
丁寧莫向詩僧道
不是眞休是病休
(東偏巨麓の頭に新トし／縦横の巖石總て幽を成す／烟雲杳靄山間に老い／溪澗は野際を彎環して流る／萬卷に生涯を

欣んで托し／一犁の心事猶求むるを數ず／詩僧に向かい
必ず道うこと莫かれ／眞休にあらずして病休なることを)

ここには幽玄な山水の間に欣然として読書し自然とともに老いゆく退溪が詠じられている。このように藏書養拙の場所を得た退溪の世俗を脱した在り方を「東巖言志」に於いて既に観ることができるが、退溪はこの菴をめぐるのはこの詩一首をのこしたのみであり、いかなる理由からか窺い知ることにはできないが、四年の後には寒栖菴を建てそこに移ったことは既に述べた。しかも、それに先だって何度も移居したのであるから、養眞菴での生活はそれほど長いものではなかったと考えられる。『退溪先生言行録』『卷三 樂山水』によれば「先生五十歲尚無家初卜于霞峯中移于竹洞教竟定于退溪之上 宅西臨溪作精舍名曰寒栖」⁶⁰⁾とあり、退溪が五十歳になって「尚無家」であったことが知られる。つまり退溪は寒栖菴を建てることで初めて家を得たのであり、逆に言えば養眞菴はいまだ家とは呼び得なかったことが窺えよう。この「樂山水」の記事にはこれに続けて「引泉爲塘名曰光影 植以梅柳開以三逕前有彈琴石東有古藤巖 溪山明媚宛然成一別區焉 丙辰歲誠一始展拜于此左右圖書焚香靜座 儼然若將終身 人不知爲官人也」⁶¹⁾と記されており寒栖菴の前には光影という池塘や彈琴石があり、東には古藤巖があったことが窺え、菴の周囲には梅や柳が植えられ、散策へと誘う逕もつけられていた。この様に簡素な庭園を備えた寒栖菴は明媚な山水の間に在って宛然として一別天地を拓いていたのである。この寒栖菴に在って退溪は焚香靜座して儼然として一生を終えるかのようにあり、人々は退溪が官人であることを知らなかったと言う。前に上げたが『退溪先生文集』『卷一』の五言絶句「寒棲」⁶²⁾を再びとりあげてみておきたい。

結茅爲林廬
下有寒泉瀉
棲遲足可娛
不恨無知者
(茅を結びて林廬と爲し／下に寒泉の瀉ぐ有り／棲遲娛しむ可きに足る／知者無きを恨まず)

背山臨水して簡素な茅廬を建て、退溪はそこに棲遲する（遊休したたずむ）ことに自足しており、それ故、「不恨無知者」と詠じられもするのである。養眞菴に於いて詠じられた「一犁心事」⁶³⁾を求むることもなく、また「丁寧莫向詩僧道／不是眞休是病休」⁶⁴⁾と詠じられた詩僧さえここには現われはしない。

養眞菴の「養眞」が陶淵明の詩からの引用であることは上述したが、この「寒棲」もまた淵明の「癸卯歲十二月中作、從弟敬遠に与う」に詠じられるところと響き合っている。

寢跡衡門下
積与世相絶

顧盼莫誰知
 荆扉昼長閑
 淒淒歲暮風
 翳翳經日雪
 傾耳無希聲
 在目皓已潔
 勁氣侵襟袖

(中略)

栖遲詎為拙
 寄意一言外

茲契誰能別

(迹を衡門の下に寝かせ／横かに世と相絶つ／顧眄する
 に誰も知るなく／荆門は昼も常に閑す／淒淒たり歳暮
 の風／翳翳たり日を経るの雪／耳を傾くるも希声なし／
 目に在りては皓くしてすでに潔し／勁氣 襟袖を侵し

(中略)

栖遲 詎ぞ拙なりと為さん／意を寄す 一言の外／この
 契り 誰か能く別たん)⁶⁵⁾

淵明のこの詩と退溪の「寒棲」にはもちろん詩の調子に陰影の差異はあるが、両者はともに簡素な家に於ける栖遲(棲遲)を詠じており、それは「娛しむ可きに足る」「詎ぞ拙なりと為さん」と詠じられる生であった。又それは「知者無きを恨まず」と詠じられ、「顧眄するに誰も知るなく」「この契り 誰か能く別たん」と詠じられる自足の生であった。

退溪の養眞菴の「養眞」は淵明の「辛丑の歳の七月、仮(賜暇)を赴りて江陵に還らんとし、夜塗口に行く」に詠じられた「(前略)／投冠旋旧墟／不為好爵榮／養眞衡茅下／庶以善自名」((前略)／冠を投じて旧墟に旋り／好爵にも榮がれざらん／真を衡茅の下に養い／庶わくは善をもって自ら名づけられんことを)⁶⁶⁾からとられたのであるが、ここでは官吏の道を捨てるという否定の契機を通して、つまり官吏の道の否定としての隠棲が詠じられている。そして、これは「真」を養い「善」をもって自ら名あらしめんとする隠棲であった。又、それと呼応して、退溪の養眞菴での隠棲も「一犁心事歎猶求」(一犁の心事 猶求むるを歎ず)るのである。ここにはなお俗世の事柄を、そしてその俗世に於ける生を否定しようとする心が働いているといえよう。官を辞して故郷に帰ることは「少無適俗韻／性本愛邱山／誤落塵網中」⁶⁷⁾と詠じる淵明にとって、又「陶山十二曲」第十曲に於いて「어디가 온다가 이제야 도라온고 / 이제나 도라오니 넌의 모습 마로리。」(どこかへ行つてうろつき回り、今こそ帰ってきたのなら、ほかに心を置くでない)⁶⁸⁾と詠じる退溪にとって、本来的な自己への帰還を意味しており、それは自覚の事柄に他ならなかったと言ひ得よう。そして、そこには非本来的な自己の在り方としての官吏への道を否定するという契機が働いていたのである。

それに対して「寒棲」「敬遠に与う」の両者がともに「寒」

に於いての棲遅であった事にここで注目しておくべきであろう。淵明の詩中には、淒淒と吹く風、皓く潔い雪、襟袖を侵す勁気等が詠じられ、一方退溪の詩では「下有寒泉瀉」と寒泉が詠じ込まれている。しかし、後者に於いてはそのことよりもこの詩が寒棲菴をめぐって詠じられた詩であり「寒棲」と題を付されていることに、より重要な意味が含まれていよう。この「寒棲」は隠棲を意味する語であり、寒栖菴は隠棲の菴であったと言えるのであるから、「寒棲」と題を付された詩が隠棲を詠じたものであることは明らかである。しかし、隠棲することを寒棲と言う、そのこと自体が、隠棲を「寒」に於いて「すまう」こととしてとらえていることを示しており、この菴が寒棲菴と名づけられていることは退溪の隠棲の境地が「寒」なる場所を拓いていたことを表わしているとしてよからう。ここで「寒」なる場所は淵明、退溪とは独立にそれ自身において存立するものではなく、淵明、退溪が隠棲することに於いて拓かれていたのであり、「寒」なる場所を得ることに於いて淵明、退溪は棲遅し得たのである。つまり、「寒」なる場所は「外に出た」⁶⁹⁾淵明、退溪自身であり、彼等の隠棲の境地そのものであったと言ひ得よう。ここにはもはや官吏への道を否定しようとする意図さえもなく、ただ端的に「寒」なる境地が拓かれているのである。

退溪の隠棲に於いて、その境地の深まりに則して「寒栖菴」の場所的意味を考察して来たが、この寒栖菴は「年譜」嘉靖二十九年の条によれば「構寒栖菴 堂名靜習讀書其中」⁷⁰⁾とあり、その中に靜習あるいは靜習堂と名づけられた退溪の讀書室があった事が知れる。

又、『退溪先生文集』「卷之二 詩」の冒頭に「十六日雨辛亥正月」として次の詩が記されている。

憶昨大雪當嚴冬
 北風怒號寒威兇
 鳥雀凍死熊羆蟄
 冷室敗絮愁病翁
 今朝雨聲滿園林
 枕上已作悲春心

(中略)

東屯西崦屢遷居

(後略)

(昨 の大雪に當に嚴冬を憶う／北風は怒號して寒威は兇なり／鳥雀は凍死し熊羆は蟄む／冷室敗絮に病翁を愁う／今朝は雨聲園林に満ち／枕上に 已 春を悲しむ心作る／(中略)／東の屯西の崦に 屢 居を遷し／(後略))⁷¹⁾

この詩の題に付された辛亥の年は西暦では1551年であり、退溪が寒栖菴を建てた次の年にあたる。又、「東屯西崦屢遷居」とあるのは寒栖菴の建築に先だつての数度の移居、そして、寒栖菴を何度か建てかえた事を詠じているのであろう。それ故、この詩は寒栖菴に於ける退溪の生を詠じたものと考えられるが、ここに「冷室敗絮愁病翁」と詠じられている事が注目される。この句に続い

て「今朝雨聲滿園林」「枕上已作悲春心」とあることから、この詩の作者（退溪）は枕上にあって園林に満つ雨聲を聞いていることが知れる。この園林については既に述べたが、その園林の中に於いて退溪は枕上にあるのであり前の句の「病翁」は退溪を指しているとしてよからう。この詩の文脈からは一般的に「年老いた病者」を意味しているとも解釈しうるが、そこに枕上に於いて春を悲しむ退溪が重ね合わされていることは明らかであろう。つまり「冷室敗絮愁病翁」は退溪自身の寒栖菴に於ける在り方をも含んでこの様に詠じられていると考えられるのである。この句にみえる「冷室」は「病翁」すなわち退溪が床に就いている室であり、あるいは十分に機能しないオンドル房のことを意味しているかと考えられるが、それはともかくとして、「冷室」が「室」とされているかぎり「堂」ではなかった事は言うまでもない。寒栖菴に退溪の読書室として「静習堂」のあったことは上にみたが、この他に退溪の寝室として「室」のあった事が推測されるのである。

「年譜」によれば嘉靖二十九年（1550年）寒栖菴を建設した時の五言絶句に「身退安愚分／学退憂暮境／溪上始定居／臨流日有雀」⁷²⁾とあり、この菴に「定居」していた事が窺え、又「陶山雜詠并記」にも寒栖菴について「始余ト居溪上。臨溪縛屋数間」⁷³⁾とあり、ここで「ト居」とされていることから、退溪は寒栖菴を「すまい」として建てたことが窺える。そして、この寒栖菴は「縛屋数間」とされているのであるから、小規模ではあったが、「静習堂」の他に別室として退溪の寝室があったとも考え得るであろう。

寒栖菴はその遺構も遺されておらず、文献からは「静習堂」以外の諸場所（あるいは齋、堂）の有無についてこれ以上論じることはできないが、この寒栖菴に関しては退溪の読書講学の場所としての「静習堂」が名づけられているのみであり、上に論じてきた様に他に寝室等の諸場所があったとしても、それらの名は遺されていないのである。つまり寒栖菴にあっては読書講学の場所としての「堂」のみが特別に有意味な場所であり、重視されており、その他の日常生活を支える諸場所は名を与えられていない事に着目しておきたい。

これに対して、陶山書堂は「年譜」によれば「堂凡三間、軒曰巖栖、齋曰玩樂」⁷⁴⁾とあり、又「陶山雜詠并記」によれば「堂凡三間、中一間曰玩樂齋（中略）東一間曰巖栖軒（中略）又合而扁之曰陶山書堂」⁷⁵⁾と記されている様に三間からなる小建築であったが、西一間には名称が付けられていないものの東と中の間にそれぞれ「巖栖軒」「玩樂齋」と名づけられていたことが知れる。

『退溪先生言行録』「卷二起居語黙之節」に陶山書堂に於ける退溪の日々の言行が記録されている。金誠一は「居處、必靜整、几案 必明淨 圖書滿壁 常秩秩不亂 晨

起必焚香靜坐 終日觀書（後略）」⁷⁶⁾と退溪の居處が静かに整えられ蔵書にかこまれて、その中で香を焚いて終日読書していた姿を伝えている。又、退溪の詩「東齋感事十絶」には「滿壁圖書一炷香／曉窓風雪隔燭光／極知細字妨昏眠／癡坐心存夜氣章」⁷⁷⁾（圖書は壁に満ち一炷香／曉の窓に風雪燭光を隔てる／細字昏眠を防ぐるを極知し／癡坐して心は夜氣章に存す）とあり、ここでも書齋に於ける上述と同様の退溪の姿を読みとることができる。ここに詠じられている東齋はこの当時の退溪の書齋中の一と考えられ、寒栖菴中の書齋か、陶山書堂中の玩樂齋、あるいは隴雲隴舎中の時習齋の中の一であることは明らかである。しかし、この詩中には「曉窓」「妨昏眠」等の句がみえることから、この書齋は退溪の居室であったとしてよい。それ故弟子達の書齋であった時習齋ではなかったと考えてよからう。

「聾巖先生來臨溪堂」という辞を付した詩に「溪西茅屋憶前年／溪北今年又ト遷／（後略）」⁷⁸⁾とあることから、寒栖菴のことを詠じていることが知れるが、ここで寒栖菴を指して「溪堂」としていることが注目される。又、「尋改ト書堂地得於陶山之南有感而作二首」にも「風雨溪堂付底牀／ト遷求勝徧林岡」⁷⁹⁾とあり、ここでも寒栖菴を「溪堂」としていることは明らかである。これらの詩を除いて「溪堂」が寒栖菴をさして用いられていることを詩の内容から直接に知ることができる例はないが、寒栖菴建築後の詩に於いて退溪は彼自身の書堂を「溪堂」と呼んでおり、寒栖菴を称して「溪堂」としていたことが窺える。これに対して陶山書堂建築後に作られた詩では退溪は彼自身の書堂（書齋）を「溪齋」「東齋」「溪堂」「山堂」等と呼んでいる。この中「山堂」は「陶山言志」冒頭に「自喜山堂半已成」⁸⁰⁾とあり、陶山書堂を指して用いられているが、他の三者については詩の内容からはどの書齋（あるいは書堂）を指示しているのか特定することは出来ない。しかし、上に述べて来た様に「溪堂」は寒栖菴のことを指して用いられていた事から推して「溪齋」は「溪堂」つまり寒栖菴の書齋であり、「東齋」は陶山書堂中の書齋、つまり玩樂齋ではないかと考えられる。また、『退溪先生言行録』「起居語黙之節」に「乙丑秋冬、性傳寓溪南書齋、見先生常處東齋、至夜深入就寢、未明、整衣冠出齋、逐日如是」⁸¹⁾とあり、ここでも退溪の居處は東齋とされている。そして性傳は溪南書齋に寓して退溪の日用の生を見ているのであるから東齋の近くに溪南書齋が建てられていたのであろう。寒栖菴は一棟のみ建てられており周辺に他の書齋があったとは考えにくい。それ故、ここに言う東齋、溪南書齋は陶山書堂の中の建築であったと考えてよいのであろう。そうであるとすれば溪南書齋は「溪南」とされていることから考えて小溪の南に建てられた亦樂書齋のことと考えられ、隴雲精舎（ここには時習齋がある）の東に建てられ

た陶山書堂の玩樂齋のことを東齋と称していたと考えてよいのであろう。

以上の様に寒栖菴に於いては静習堂のみが名づけられており、その建設直後はもっぱら溪堂と呼ばれ「堂」である事が重視されていたが、陶山書堂建設後は溪齋とも称されるようになったと考えられる。陶山書堂に於いては建物自体が堂とされており、その重要な一室として玩樂齋があった。また、この建物は山堂、東齋と呼ばれるなど「堂」、「齋」がともに重要な意味をもっていたことが窺える。つまり、陶山書堂建設後は退溪の隠棲に於いて「堂」ばかりでなく「齋」が重視される様になったことが窺えるのである。

退溪は1557年陶山の南に地を得、翌年には蒼浪臺（1561年に記された「陶山記」中では既に天淵臺と改称されている）を築いた。「年譜」によれば嘉靖三十九年（1560年）の記事に「陶山書堂成」⁸²⁾とあり、この年陶山書堂が完成したことが窺える。また、この記事に続いて「自是又號陶翁，堂凡三間，軒曰巖栖，齋曰玩樂（中略）先生每至陶山 常居玩樂齋」⁸³⁾とあり、この時、巖栖軒と玩樂齋は既に在ったと考えてよからう。そして、「常居玩樂齋」と記されているのであるから、玩樂齋はこの時には「常に居る」ことができる程になっていたであろう。しかし、既にみた「陶山言志」に於いても「自喜山堂半已成」⁸⁴⁾とあった様に、この詩の作られた1561年には陶山書堂が「半已成」であって完成していなかった事が窺え、『言行録』『樂山水李德弘』の辛酉（1561年）三月晦の記事には「到玩樂齋時翺立未就坐節友社梅下」⁸⁵⁾とあり、この時玩樂齋が創立されてはいたが未だ完成されていなかった事が知れる。

陶山書堂は三間という極めて小さく簡素な堂であるが、陶山に土地を得てから四年の年月を経て未だ完成していなかったものであり、特に玩樂齋は遅れて完成したと考えられる。

『言行録』『二居家』に「玩樂齋新建先生顧德弘曰、吾意本在矮屋、而木工當我入齋於墳庵、自作張皇、高大至此、心甚愧恨也 李德弘 齋高八尺 廣八尺」⁸⁶⁾とあり、玩樂齋は高八尺廣八尺にすぎない小室であるが、これでさえ退溪が墳庵に入って祭祀をしている間に木工（大工）が勝手に作ってしまって高大すぎて愧ずかしいと言うのである。ここにも「玩樂齋新建」と記されており、玩樂齋が陶山書堂の他の部分とは別途の工事によって建てられた事が窺える。

又、同じく『言行録』『二居家』に「德弘祖父沙家斜廊一間 未足於接客 蔽雨以茅 廣軒以板 先生每見歎其儉素 寒栖 巖栖軒 皆依其制」⁸⁷⁾とあり徳弘の祖父の家が斜廊一間の小さな茅屋でまことに儉素であったのをまねて寒栖、巖栖軒を建てたとされている。ここで寒栖というのは寒栖菴を指すと考えられるがこの寒栖菴

と巖栖軒とが並べてあげられていることが注目されよう。寒栖菴は静習堂を含む数間からなる一棟の建築物であるのに対して巖栖軒は三間からなる陶山書堂の東一間を占める部分であるにすぎない。それにもかかわらず寒栖菴と巖栖軒が並べてあげられているのである。

このことは寒栖菴に続いて陶山書堂が建てられた時、まず巖栖軒が完成され、この巖栖軒が隠棲処としての寒栖菴の在り方をひきついでいたことを示しているのではなかろうか。「寒栖」が隠棲を意味する語であることは既に述べたが、「巖栖」も同じく隠棲を意味する語であることは周知の事であろう。この巖栖について「陶山雜詠」に

曾氏稱顏實若虛
屏山引發晦翁初
暮年窺得巖栖意
博約淵冰恐自疎

（曾氏顔淵に稱して實にして虚／屏山は晦翁に初めて引發し／暮年巖栖の意を窺がい得／博約淵冰自から疎なるを恐る）⁸⁸⁾

とあり、又、「陶山記」に巖栖軒の命名について朱子雲谷の詩「自信久未能巖棲冀微効」（自ら信ずることまだ久しく能はず巖に棲まい微効あるを冀^{こいねがう}）⁸⁹⁾からの引用であることが記されている。ここで「巖棲」は文字通り巖のもとに棲むことを意味しているものであり、その様にして「すまい」つつ存心窮理する厳しい修養の姿を窺い得よう。そして、寒栖菴についても「移草屋於溪西名 寒棲庵」という序を付して、つまり「寒棲菴」⁹⁰⁾という命名との関連のもとに

茅茨移構澗巖中
正值巖花發亂紅
古往今來時已晚
朝耕夜讀樂無窮

（茅 茨 を澗巖の中に移し構え／正に巖花紅を發し亂れるに値る／古 往き今來りて時已に晩し／朝耕夜讀して樂 窮 無し）⁹¹⁾

と詠じられている。冒頭の第一句は序をそのまま詩中に移し入れた内容であり、「寒棲」が巖のもとに「すまう」ことを意味していることが知れよう。それは「樂無窮」とは詠じられはするが、同時に「古往今來時已晩」と詠じられる両義的な時間に於ける隠棲であった。

五 結

李退溪の養眞菴、寒栖菴、陶山書堂をめぐって考察した。

「陶山記」によれば陶山書堂の建てられた場所は風水説に従って背山臨水するところとしてとらえられており、そこでの生は肥遯、考槃という語で表わされる隠棲、隱遁の生とされていた。そして、そのように山水の間に

「すまう」ことが、退溪の生の深い次元に於ける実現に不可欠の事柄と考えられていることが「楽山楽水論」をめぐる退溪の言説に従って明らかとなった。

退溪は山水の間に於いて修業しつつ「すまう」場所として、菴あるいは書堂を数多く建てているが、中でも養眞菴、寒栖菴、陶山書堂はその名も伝えられており、建設場所も慎重に選地された事が「陶山雜詠并記」、「言行録」、「楽山水」等に窺える。本小論ではこれら養眞菴、寒栖菴、陶山書堂に於いて賦された詩をめぐる背山臨水して「すまう」ことの意味の解明をめざした。

養眞菴に於いて実現された退溪の隠棲は「一壺心事歎猶求」と詠じられるように、またこの菴の養眞という命名からも知られるように、官吏の道を捨てるという否定の契機を通して本来的な自己へと帰還することをめざしていた。そこには俗世に於ける生を否定しようとする心が働いていたと言えよう。つまり養眞菴は俗世ではない場所、世俗を離れた場所でなければならなかったのである。

これに対して寒栖菴においては端的に「寒」なる場所が拓かれており、その「寒」なる場所は「外に出た」退溪自身であり、退溪の隠棲の境地そのものであったことを観た。この寒栖菴を築く以前には退溪は「先生五十歳尚無家」であったのであり、寒栖菴の建設に於いてはじめて家を得「すまう」ことを実現し得たのである。

寒栖菴に次いで退溪は陶山書堂を建設したが、寒栖菴に於いては読書講学の場所としての「静習堂」のみが名づけられていたのに対し、この陶山書堂に於いては「巖栖軒」とともに「玩樂齋」の名が伝えられている。寒栖菴を引き継いでまず巖栖軒が完成され、玩樂齋は別途の工事として遅れて完成された。「寒栖」「巖栖」はともに巖のもとに隠棲して「すまう」ことを意味しており、それは「樂無窮」と詠じられはするが、同時に「古往今來時已晚」と詠じられる両義的な時間に於ける隠棲であったことを観とどけた。陶山書堂の完成は退溪の隠棲にとって重要な意味を持ったと考えられ、建築に関してもその名称や多くの漢詩から「堂」ばかりではなく「齋」が重視されるようになったことが読みとれる。それ故、陶山書堂を具体例として、山水の間に於いて、背山臨水して「すまう」ことの意味の究明をめざす本小論にとって、玩樂齋をめぐる考察が必須のことであるが、それについては次稿に譲ることとする。

註

- 1) 壬辰倭乱は文禄の役のこと、丙子胡乱は1636年に起きた清の太宗による朝鮮侵略のことを言う。朝鮮国王仁祖は臣従を誓わされた。
- 2) ここに言う場所論的究明については拙稿「すまう」ことを求めて（建築史における建築の意味の研究——その意義と方法——）

日本建築学会大会（九州）建築歴史・意匠部門 研究協議会（2）資料

を参照されたい。

本稿は上記の論考に法り、個別の具体例に則して「すまう」ことの意味の究明を試みるものである。

- 3) 退溪先生年譜卷之一 九右
同上 十左
増補退溪全書 三（影印本）成均館大學校大東文化研究院 ソウル 1985 p.580
退陶先生言行通録卷之六にも西厓柳成龍撰になる「年譜」があるが内容は前掲書とほぼ同一とみられる。繁雑をさけて上掲の一書のみを引用文献としてあげておく。以下「年譜」の引用に際してはこれにならう。
- 4) 陶淵明 筑摩叢書 東京 1966 に付けられた陶淵明詩文集を参照した。p.341
これは陶樹「陶靖節集」によっていると言う。
- 5) 寒栖菴は寒棲菴とも表記される。ここでは引用に於いては原文中の表記を尊重し、原則的には前者の表記を用いることにする。
- 6) 退溪先生文集卷一 四十七左—四十八右
増補退溪全書 一（影印本）成均館大學校大東文化研究院 ソウル 1985 p.70
- 7) 退溪先生文集卷三 五左—十四右 増補退溪全書 一 p.100-104
- 8) 退溪先生文集卷三 五左 増補退溪全書 一 p.100
- 9) 退溪先生文集卷三 六右 増補退溪全書 一 p.100
- 10) 退溪の原文（漢文）の和訳に際して特記のない場合は 국역 퇴계집 민족문화추진회 1968を参照した。
- 11) 退溪先生文集卷三 六右—七左
増補退溪全書 一 p.100-101
原文は「爰有小洞前俯江郊幽邃廓巖麓悄蒨石井甘冽允宜肥遯之所」
- 12) 同上 六右—七左 p.100-101
- 13) 本田済 中国古典選2 易 下 朝日新聞社 東京 1978 p.30
- 14) 同上 p.30
- 15) 同上 p.370-371
- 16) 同上 p.24
- 17) 同上 p.24
- 18) 同上 p.30
- 19) 同上 p.30
- 20) 同上 p.30
- 21) 退溪先生文集卷三 十一左 増補退溪全書 一 p.103
- 22) 退溪の漢詩の解釈には特記のない場合 李家源 李家源全集第24集 退溪詩譯注 正音社 ソウル 1987
を参照した。又、一部 王甦 退溪詩學 退溪學研究院 ソウル 1981 所載の詩については前掲書に合わせてこれも参照した。
- 23) 退溪先生年譜卷之二 一右 増補退溪全書 三 p.585
この詩は 退溪先生文集卷三 二十九左
退陶先生言行通録卷之三 三十二右
にもあげられている。
- 24) 退溪先生文集卷三 二十九左

- 増補退溪全書 一 p.112
- 25) 退陶先生言行通録卷之三 三十二右
増補退溪全書 四 (影印本) 成均館大學校大東文化
研究院 ソウル 1985 p.59
- 26) 論語 岩波書店 東京 1963 p.154
- 27) 退陶先生言行通録卷之三 三十二右
増補退溪全書 四 p.59
退溪先生年譜卷之二 一右 にも同一の記事がみえる。
- 28) 退陶先生自省録卷一 二十五右-二十七右
増補退溪全書 三 p.165-166
- 29) 論語 岩波書店 東京 1963 p.85
- 30) 退陶先生自省録卷一 二十五右
増補退溪全書 三 p.165
- 31) 退陶先生自省録卷一 二十六右
増補退溪全書 三 p.165
- 32) 中國子學四書集註 論語三 十七左
- 33) 退陶先生自省録卷一 二十五右
増補退溪全書 三 p.165
- 34) 中國子學四書集註 論語三 十七左
- 35) 論語 岩波書店 東京 1963 p.85
- 36) 退陶先生自省録卷一 二十五右, 左
増補退溪全書 三 p.165
原文は「觀朱子集註兩下有似字似釋之可見其意故其下文
動靜之訓亦以體段而言樂壽之義亦以効驗而言皆非眞論仁
智本然之理也」
- 37) 論語 岩波書店 東京 1963 p.85
- 38) 退陶先生自省録卷一 二十五左
増補退溪全書 三 p.165
- 39) 同上 二十五左 p.165
- 40) 註 29) 参照
- 41) 註 30) 参照
- 42) 退陶先生自省録卷一 二十六右
増補退溪全書 三 p.165
- 43) 退溪先生文集卷三 十右
増補退溪全書 一 p.102
原文は「有慕玄虛事高尚而樂者」
- 44) 同上 十右 p.102
原文は「有悦道義頤心性而樂者」
- 45) 同上 十右 p.102
原文は「則恐或流於潔身亂倫而其甚則與鳥獸同羣不以爲
非矣」
- 46) 同上 十右 p.102
原文は「則所嗜者糟粕耳至其不可傳之妙則愈求而愈不得
於樂何有」
- 47) 同上 十左-十一右 p.102-103
- 48) 同上 十一右 p.103
- 49) 同上 十一右 p.103
- 50) 論語 岩波書店 東京 1963 p.154
- 51) 李家源 前掲書 p.286
- 52) 退溪先生言行録卷五 十一右
増補退溪全書 四 p.235
- 53) 退溪先生文集卷三 二十二左
増補退溪全書 一 p.108
- 54) 退溪先生年譜卷之一 九右-九左
増補退溪全書 三 (影印本) 成均館大學校大東文化
研究院 ソウル 1985 p.580
- 55) 同上 十右 p.580
- 56) 退溪先生文集卷三 六右
増補退溪全書 一 (影印本) 成均館大學校大東文化
研究院 ソウル 1985 p.100
- 57) 退溪先生言行録卷三 五左
増補退溪全書 四 (影印本) 成均館大學校大東文化
研究院 ソウル 1985 p.201
- 58) 退溪先生年譜卷之一 九右 増補退溪全書 三 p.580
- 59) 退溪先生文集卷一 二十八右 増補退溪全書 一 p.60
- 60) 退溪先生言行録卷三 五右 増補退溪全書 四 p.201
- 61) 同上 五右 p.201
- 62) 退溪先生文集卷一 四十七左-四十八右
増補退溪全書 一 p.70
- 63) 同上 二十八右 p.60
- 64) 同上 二十八右 p.60
- 65) 李長之 陶淵明 筑摩叢書 東京 1966 所載 陶淵明
詩文集 p.342-342
日本語訳は同上 p.106 を引用した。
- 66) 同上 p.341 日本語訳は同上 p.71
- 67) 同上 p.334
- 68) 若松實 韓国の古時調 高麗書林 東京 1979 p.87
- 69) 和辻哲郎の『風土』に「寒さ」をめぐって論じている。「我々」
と「寒気」との区別は一つの誤解であることを示し、「寒
さを感じる時我々自身はすでに外気の寒冷のもとに宿っ
ている。」と言う。そして、この在り方を「外に出ている」
(ex-sistere) という語で述べていることが注目される。
- 70) 退溪先生年譜卷之一 十左 増補退溪全書 三 p.580
- 71) 退溪先生文集卷之二 一右 増補退溪全書 一 p.74
- 72) 退溪先生年譜卷之一 十左 増補退溪全書 三 p.580
- 73) 退溪先生文集卷之三 六左 増補退溪全書 一 p.100
- 74) 退溪先生年譜卷之一 十七左 増補退溪全書 三 p.584
- 75) 退溪先生文集卷三 七右 増補退溪全書 一 p.101
- 76) 退溪先生言行録卷二 十左 増補退溪全書 四 p.187
- 77) 退溪先生文集卷三 二右 増補退溪全書 一 p.98
- 78) 退溪先生文集卷二 七左 増補退溪全書 一 p.77
- 79) 同上 三十九左-四十右 p.93
- 80) 同上 三十三右 p.114
- 81) 退溪先生言行録卷二 十一左 増補退溪全書 四 p.188
- 82) 退溪先生年譜卷之一 十七左 増補退溪全書 三 p.584
- 83) 同上 十七左 p.584
- 84) 退溪先生文集卷二 三十三右 増補退溪全書 一 p.114
- 85) 退溪先生言行録卷三 六右 増補退溪全書 四 p.201
- 86) 退溪先生言行録卷二 十八右 増補退溪全書 四 p.191
- 87) 同上 十七左-十八右 p.191
- 88) 退溪先生文集卷三 十一左 増補退溪全書 一 p.103
- 89) 朱子大全 文集卷六 十六左
- 90) 退溪先生文集卷一 四十六左 増補退溪全書 一 p.69
- 91) 友枝龍太郎 前掲書 p.28

(1989 年 11 月 10 日原稿受理, 1990 年 4 月 7 日採用決定)